

BANGLADESH STUDY TOUR 23th



第23回 ACEF スタディーツアー参加者名簿(2002. 8. 9~23)

	氏名	学校又は職業
A チーム (カティラ)		
1	井上 儀子	ACEF 事務局員
2	山口 旬	横須賀学院小学校教諭
3	小野 薫	東京女子医科大学 看護学部 1 年
4	小川 清佳	東京女子大学文理学部 心理学科 3 年
5	近藤 有紀子	東京女子大学文理学部 史学科 3 年
6	伊藤 さつき	東京女子大学文理学部 社会学科 2 年
7	安東 真理	東洋英和女学院大学 国際社会学部 2 年
8	倉本 緑	昭和大学保健医療学部 看護学科 1 年
9	高見澤 翠	東京女子大学現代文化学部 コミュニケーション学科 1 年
10	津田 悦実	山梨英和高等学校 2 年
11	葛西 芙美子	東奥義塾高等学校 2 年
B チーム (ネトロコナ)		
1	船戸 良隆	ACEF 事務局長
2	大木 正人	山梨英和中学高校宗教主任
3	木部 紫	主婦(パートタイマー)
4	牧野 彩華	皇學館大学社会福祉学部 社会福祉学科 4 年
5	宗形 恭枝	東京女子大学現代文化学部 言語文化学科 3 年
6	井上 歩	東洋英和女学院大学 国際社会学部 2 年
7	関口 由佳	東京女子大学文理学部 社会学科 2 年
8	森 麻衣子	東京女子大学文理学部 史学科 1 年
9	藤沢 美由紀	東京女子大学文理学部 社会学科 1 年
10	山崎 裕子	山梨英和高等学校 2 年

23th BANGLADESH
STUDY TOUR!!!夏

目次

- 23th スタディツアーメンバー名簿 1P
 - 目次 ... here!! 2P
 - バングラデシュ概要 3P
 - ACEF・BDPの活動力 4P
 - 全体日程 5P , 一日の日程 6P
 - Ateam 日程 7P
 - Ateam 報告書 9P
-
- Bteam 日程 21P
 - Bteam 報告書 23P
 - アンケート 35P
 - 編集後記 38P

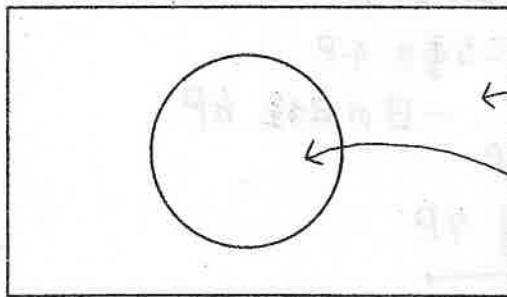
BANGLADESH

ACEF

バングラデシュ概要

国名はバングラデシュ人民共和国。1971年にパキスタンから独立した。北海道の約2倍の面積に1億3127人（大部分がベンガル人）が住み、その86.8%がイスラム教徒である。

国土は、ガンジス川とブラマプトラ川が合流し大河となってベンガル湾に注ぐ世界最大のデルタ地帯である。全面積の80%は海拔9m以下にあるので、雨季には国土の約3分の1が水没する。また、洪水やサイクロン等の自然災害が頻繁に発生し、平均寿命は58歳と低い。1人当たりGNPも400ドル以下と極めて低く、世界で最も貧しい国とされている。成人識字率は48.7%で、学校に行けない子供が多い。よって現在は日本を含む多くの先進国やNGO協力のもとに、国の環境改善に励んでいる。



緑：緑の豊かさや国民の力強さ、若々しさ
赤：勝ち取った独立を表す。
昇る太陽と多くの犠牲者の血

↑日本とぞっくりですね…

国家は東洋人で初めてノーベル文学賞をとったベンガルの詩聖、タゴールの「我が黄金のベンガル」

国花はシャプラ（睡蓮の花）、国魚はイリシュ（でっかい川魚）、

国鳥はドエル（こまどり）、また国の動物ではベンガルタイガーが名高い。



BDP & ACEFについて

☆BDP(Basic Development Partners)☆

「教育は、人間としての尊厳と生きる力を育てるための基礎である。」

1990年、教育の重要性を痛感した医師、ミナ・マラカール女史が、首都ダッカのスラム地区で幼稚園を始めたことがきっかけとなって設立された、ベンガル人によるキリスト教の NGO 団体です。学校に行けず、田や畑で働いたり、街で物売りをしている子どもたちが、働きながら通える寺子屋学校を開き、一人でも多くの子どもたちに教育の機会を与えたいと願っています。

(責任者：Albert Malakar)

★BDP の活動★

- ① 寺子屋幼稚園 ② 寺子屋小学校 ③ 卒業生に奨学金
- ④ 職業訓練学校 ⑤ 保健衛生教育 ⑥ 文化活動(音楽、舞踊等)

☆ACEF(アジアキリスト教教育基金)☆

マラカール女史の呼びかけに答えて、バングラデシュで教育の機会に恵まれない子どもたちに「寺子屋を贈ろう。」と、1990年に日本で発足した NGO 団体です。BDP と共に、バングラデシュの基礎教育のために共働しています。また、バングラデシュを始め、広くアジアに目を向け、多くのことを学びながら現在の私たちの生活を見つめ直し、アジアが抱える問題を捉えています。

★ACEF の活動★

- ① 年2回(夏と冬)のスタディーツアー ② 年2回(春と秋)の ACEF セミナー
- ③ 書き損じ葉書・テレホンカード回収 等

☆ACEF と BDP の関係☆

ACEF は BDP に財政的な援助をしています。その関係は、与える側・もらう側という関係ではなく、対等な CO-WORKER として活動しています。発足から12年、このふたつの団体が守られ発展してきた原動力は、まさにこの信頼関係にあるのです。

第23回 (2002夏) スタディーツアー日程

- 8月 9日(金)・・・成田発(BIMAN BANGLADESH 航空)バンコク経由 ダッカ着
- 10日(土)・・・開会礼拝
アルパートさんのお話(BDPについて)
寺子屋学校訪問、ヒンドゥー教の村訪問
- 11日(日)・・・大雨で教会行けず
ニューマーケットでお買い物
- 12日(月)・・・寺子屋学校訪問、カルチャーショー♪、家庭訪問(生徒の家など)
- 13日(火)・・・寺子屋学校訪問
- 14日(水)・・・農村へ移動
↓ Aチーム☆カティラへ
↓ Bチーム☆ネトロコナへ
↓
↓
- 19日(月)・・・農村よりブーバイルへ戻る
- 20日(火)・・・BDPの先生方とディスカッション
サリーの着付け&メンディ
ヒンドゥーのお祭りへ参加
- 21日(水)・・・アーロンデパートとニューマーケットに分かれてお買い物
カルチャーショー♪
- 22日(木)・・・Wrap-up ディスカッション(BDPスタッフと共に)
閉会礼拝
みんなで記念撮影
ダッカ発(BIMAN BANGLADESH 航空)バンコク経由
- 23日(金)・・・成田着



したいの

1日の日予定

6:00 起床

6:00 ラジオ体操

6:30 朝の礼拝

7:00 食事

↑
学校訪問

午後 食事

Freetime

3:00 teatime

夜 夜の礼拝

食事

シェアリング

10:00 就寝

※ 買物日、孝行会に行く日、
サリー着付け日、and
田舎⇄都市会の移動日
除く。



Aチーム in カティラ

8月14日(水)~19日(月)

<BDP スタッフ> ファルーク
さん、ステファンさん、シャゴー
ルさん、バーナードさん、ダニエ
ルさん、ビーブルさん、ビノイさ
ん、ジョセフさん

<メンバー> のりこさん、やまじゅん、
かおり、さやか、ゆきこ、さつき、まり、
くらちゃん、みどり、えっちゃん、ふみこ

<8月15日(木)>

カティラで迎える初めての朝。ラジオ体操で一日が始まります。この日は、バンに乗って、全員で学校訪問。ついに、“大きなかぶ”を披露しました。見ていた子どもたちの反応は、なかなかよかったかな?! かわいい花束をたくさんもらって感激です! お昼ごはんには、ヨーグルトをいただきました。甘くておいしいと大人気! 夕方は、ルンギを買いに行ったり、子どもたちと折り紙(つる、箱、飛行機が人気☆)をしたり踊ったり、楽しく過ごしました。



<8月14日(水)>

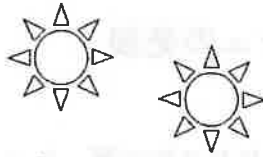
早起きして、カティラへ!! Bチームのみんなとはしばしのお別れ。ダッカのバス停から、高級バスに乗り、ひたすらカティラを目指す。途中、バスごと船に乗り移動。果物、魚、お菓子、本を、頭や手に抱えて売るベンガル人に目を奪われる。バス下車後は、テンポに乗った。そして、たくさんの緑に溢れるカティラに到着。約8時間の道のり。宿舎は病院でした。

みんなが無事に着けて一安心♪

夜は“大きなかぶ”の練習をしました。

<8月16日(金)>

2チームに分かれて、アンボイラスクール、イーストバグダッドスクールに船で行きました。帰りの船の中では、毎年恒例(?)の水かけっこ! BDP スタッフは大はしゃぎ! びしょ濡れになったり、川に落とされたり、大変な事に! 昼食後は、学校の先生方(一番若い先生は20歳!)と教育についてのディスカッション。学校に欲しい物(遊具、大きい鉛筆削り、掲示板、電気などだそうです。)などを聞きました。グループに分かれてからは恋話で盛り上がりました。



<8月17日(土)>

カティラでの最後の学校訪問。2グループに分かれて、シャチモリアスクールとランデベルバルスクールへ。途中、選挙の様子を目撃。夕方からは病院の屋上でカルチャーショー♪着飾った子どもたちがとてもかわいかった。顔のメイクもばっちり！Tea Time ではもちろん、カティラのチャーは大人気！

☆☆☆“チャーディン！”☆☆☆

ピープルさんは、日本語に興味津々。夕食まで笑いの絶えない楽しい時間を過ごしました。

<8月18日(日)>

今日は日曜日。15分位歩いて近くの教会へ。教会の建物はとても立派。ゴザに座り、向かって右に男性、左に女性が座ります。礼拝は、なんとなく理解できたかな。そして、私達はみんなの前で賛美歌を歌いました。帰りは、スコールのため、教会で雨宿り。その間、かわいい女の子が歌を歌い、みんなで楽器を演奏し、とても盛り上がりました♪宿舎に着いてからは、池で泳いだり、休んだり。その後、リキシャに乗ってマーケットへ。行く所行く所、人だかりができ、すごいことに！本やノート、チュリなどを買いました。夜は、スタッフと共にシェアリング。スタッフのコメントはとても心に響きました。

<8月19日(月)>

ついに、プーバイルへ戻る日。

ラジオなしのラジオ体操も今日で最後。カティラでの6日間はほんとにあっという間だった。「神ともにいまして」と「シャローム」を歌い、記念撮影をして出発。リキシャとテンポーに乗ってバス停へ。ここでカティラスタッフとはお別れ。最初から最後まで温かく接してくれたスタッフに、ありがとうの気持ちでいっぱい。

そして、また私達は猛スピードで走るバスで、プーバイルへ向かった。

…久しぶりにBチームのみんなと再会。全員が無事揃えたことに感謝☆



バングラデシュの発展

井上儀子

初めてバングラデシュを訪れたのは1992年の夏、ちょうど今から10年前です。この10年でバングラデシュはすっかり変わってしまいました。

まず空港では、タラップから降りた所からすでに水浸し。びちゃびちゃ靴を濡らしながらビルに入ったのですが、今では普通の空港のようにウイングから直接ビルに入り、床はぴかぴかに磨いてあります。空港には真夜中でも、物乞いの子どもがあふれ右からも左からも手が伸び、その子どもたちを追い払う警官とでごったがえしていました。今ではゲートの門が閉められ、出迎えの人々も入ってこられなくなりました。

街の道路は車線も、中央分離帯も、信号もなく、少しの車と、バス、ベビータクシー、リキシャ、それに人と牛が自由に行き交っていました。のんびりと言うか渾然とした状態でした。現在では車の数が膨大に増え、相変わらずベビータクシー、リキシャもひしめいているので、とても危険な上、渋滞と排気ガスで、世界のワースト1に挙げられています。

ダッカ郊外のプーバイル村は、車で40分くらい走った北に位置しますが、今は車で1時間半から2時間かかることもあります。電気もなく、ただ真っ暗闇の村だったのが、電気が引かれたことにより、市場が盛んになり、それに伴い人々の往来も多くなり、車の数も増えていきました。10年前はリキシャの数さえ少なく、学校訪問はすべて歩いてまわりました。一日中歩いていたような気がします。今はメイン道路は大型トラックもたくさん通行しているので、リキシャに乗っていると吹き飛ばされそうです。BDPのプーバイル事務所の近くも、どんどん木を伐採してアジアンハイウェイの工事が始まっています。

私たちは発展した国からやってきて、バングラデシュの自然に心洗われ、静かな時の流れに身を委ね、この状態をいつまでも保ってほしいと勝手なことを言います。10年前にホームステイをした家で、このことを述べたとき、「こんな真っ暗な田舎のどこがいいのか！私はダッカの都会に住みたい。」と言われたことがずっと頭に残っています。発展とは何と難しい問題でしょう。生活が便利になることは嬉しいのですが、その裏で様々な問題がしわ寄せになっていかないようにと願います。

やっぱり私たちはお客さまだった？

山口 旬

このスタディツアーでは学ぶところも多かったけど、やはり反省させられることがほとんどでした。まあ学ぶってことは反省がもとになるもんですからそれはそれでいいと思ってますが。

そもそもACEFおよびBDPというのはバングラデシュの子供たちに教育の機会を与えようというのが活動の根本です。その活動、現状をしっかりと自分の目で見て、考えること。それがこのツアーの目的だと思っています。今自分に出来ることは何か、自分はこういう人たちの前でいったい何が出来なのか、日本という国に生まれ育ち、そしてこれからもこの国で生きていくであろう自分は何をするべきなのか、等々。明確な答えは出なくとも、これから歩いていく道のきっかけとなるものが一つでもあればよい。少なくともそういうことを考える機会を与えられただけでもめっけもんだ。正直な話、私はそんな気持ちでこのツアーに参加しました。

では上記の目的は達せられたか。ハイ、一応は。今の自分の立場で出来ること、小学校教員として伝えていかねばならないことは自分なりにぼんやりとではあります。いくつか見出せたとは思っています。ただ、帰国して考えれば考えるほど、このツアーでの自分の姿勢に疑問を感じてしまったのでした。もちろんふざけて接していたわけでもなく、いい加減な態度で臨んだわけでもありません。でももっとしっかりと認識しなければならないことがあったと思うのです。

BDPのスタッフはこのツアーのために多大な犠牲を払って私たちを迎えてくれたことは想像に難くありません。もっとも大きな犠牲は、我々のために通常業務を2週間ストップさせていたという点です。ダッカオフィスのスタッフは本来の教育活動をしないうちのためにつきっきりでもてなしてくれていた。プーバイルスタッフとて同じ。私たちと一緒にいるときは遊んでいるみたいに見えるけど、おそらくこの間通常業務は私たちがいるから出来ないだけの話。ましてや最終日に行われた先生たちとの交流会なんぞは、その地区の学校を全部休校にしてまで行っているという。BDPは夏休みもなしで学校を開いているのに、私たちをもてなすために学校を休みにしている。でもこれって本末転倒なんじゃ…？ そんな念が脳裏をかすめたりもしましたが、もちろん、むこうもこのツアーの重さを理解していろいろな企画をしているのは百も承知。問題はそれを受け止める私たち。このツアーで彼らに返せるものはなにか。「それは感謝です」というのは簡単。でもなんか違うんだよな。はっきりとはわからないけど。なんだかんだ言っても私たちはお客様扱い。あれだけのことをしてくれた人たちに対して、私たちが出来ることって…。やっぱり見たこと聞いたことをどれだけ重く受けとめてこれからの生き方に生かしていくか…。う～ん日本語って難しい。ようするに反省してます。機会があったらもう一度参加しよっと。

スタディツアーに参加して

小野 薫

爪にしてもらったバングラデシュの橙色のお化粧、メンディーは当分消えそうにありません。でも、これを見るたび、バングラデシュで見たいろんな光景をふと思い出せるので、爪が伸びるまでしばらくはゆっくり残しておこうと思います。

ダッカの空港に到着して外に出たとたん、近づいてきた物乞いの少年、道にあふれている人力車と自動車、ダッカの街並みでの貧富の差、乗り物に乗るといつも景色をじっと眺めていました。初めての異国の地はずっと眺めていても飽きませんでした。そして、プーバイルに着いて土を踏んだとき「ああ、ここにも同じ草があって、土がある。同じ空だ」とふと思いました。スタディツアーを終えて約3週間、一言そこにつけたしたいのは「そしてそこには私の友達がいる」ということです。言葉は通じないのに手をしっかり握ったまま、離そうとしない小さな女の子のぬくもりは未だに忘れられません。

最終日の礼拝で船戸先生は「自分がいかに生きていきたいか、今この時期に真剣に考えてほしい。それが20年、30年後に大きく影響するのです」と力強くおっしゃっていたことが、今も私の中で大きく響いています。私には、いかに生きていくかの選択肢があります。しかし、世界にはその選択肢を選べない人がいます。一人でも多くの人がその選択肢を持てるよう願っています。バングラデシュでの経験が、これからにどうつながるか、うまく言葉にできませんが、あたため続けていきたいと思います。

私はこのツアーの目的として、発展途上国の国に観光する私たちに対して、その国の人はどう考えるのか、ということがありました。もし自分があちらの立場で先進国の人いきなり写真を撮られたりとかしたら不快だなと思っていたけれど、こちらの人は写真を撮ってもらいたがったり、考え方の違いに驚いてしまいました。私はただ「自分が相手の立場だったら」と考えていたのだと気がきました。相手は自分とは違う文化・考えを持っているのであり、まず相手を良く知ることが大事だなあ、と思いました。でも文化が違うといってもこちらの方で自分が不快だと思うことはしない誠意は持っているべきだとも思うし、まだまだ、考えなくてははいけないなと思います。

今回バングラデシュに行くことだけでなく、初めて観光目的でないツアーに参加することで、色々と普段触れることのないものと触れて、考える機会があったことも良かったと思います。バングラデシュの人々、文化、貧富の差の大きい現状、NGOが行っている働きの一部、キリスト教・・・知らない世界をたくさん見ることが出来ました。

また、皆の様々な意見が聞けたことは、とても面白かったし勉強になりました。皆で話し合いをしてもっと意見を深める時間があれば、と思うと残念ですが、自分では思いもしなかったことを思わず考えさせられたりして、とても興味深かったです。

このツアーで、考えていたことがより深まるかと思って参加したのですが、余計考えることが増えてしまいました。でも、自分はまだまだ分かっていない世界が広くあるということを再認識出来て、良かったと思います。そしてこれからも今回学んだことを考えていきたいと思います。

小川 清佳

バングラデシュに出会った、、、

近藤有紀子

バングラデシュから帰国して3週間が過ぎようとしている。バングラデシュでの2週間は、本当に内容の濃いものだった。毎日が、驚きや発見の連続で、五感がフル回転だったように思う。まだ、夏休みということもあって、今の日本での生活の方がのんびりしている気さえする。そして、毎日のように、バングラデシュのことを思い出す。例えば、カレーを食べている時、スーパーでマンゴーやパイナップルを見た時、紅茶を飲んでいる時。(って、食べ物ばかり…。)自転車に乗りながら、「大きなかぶ」や「エイ ポッター」を口ずさんでいる時もある。また、新聞に、「バングラデシュ」という言葉を発見すれば、必ず目を通して。このツアーを通して、バングラデシュをととても近く感じるようになったのは言うまでもない。そして、バングラデシュで経験したあらゆる事は、私の中に、さまざまなかたちで、しっかりと刻み付けられている。あのキラキラした子供たちの笑顔と共に。

子供たちとの交流の中で、学んだことはたくさんある。そのひとつは、コミュニケーションをとるのに、“言葉の壁”なんて、その他のことでどうにかできるということ。片言のベンガル語と英語に、身振り手振り、笑顔、歌、踊りがあれば、心は通じ合う。もちろん、完璧ではないけれど、それで楽しい時間が過ごせれば、素晴らしいと思う。こんなことがあった。カティラの子供たちと折り紙で遊んでいる時、ある子が、一生懸命何かを作っているとベンガル語で言っている。でも私は、その肝心の何かが、ベンガル語のため、さっぱり分からず、困ってしまった。その時、私は何を思ったか、「うさぎを作って。」と言っているのかと勝手に考え、「えっ、うさぎ??」と、うさぎの真似をしてみた。でも、その子は首を振っている。そして、その子は、空のほうを見て、指をぐるぐる回した。効果音もついていた。「あっ、分かった。飛行機か!」その上、どこからか、「Plane ! Plane !」という声。英語の分かる子が、教えてくれていた。これで、一件落着。私は、この、何気ないやり取りがとても楽しくて、この時のことをよく覚えている。コミュニケーションという、何かと、言葉を一番に考えがちだが、まずは、伝えようとする気持ちと、感じ取ろうとする気持ちだと実感した。

バングラデシュに行って、本当に色々なことを考えた。感謝の気持ち、貧しさと豊かさ、環境や自然の大切さ、健康の大切さ、教育の重要性、心強い仲間への感謝の気持ち、宗教、日本での生活、生きるということ…。このツアーで考えたことや、考え始めたことを、経験や思い出だけにとどめるのではなく、自分を見つめ直し、生きていく上での、指針にしようと思う。

バングラデシュで出会った子供たち、BDP のスタッフ、メンバーのみなさんに心から感謝しています。本当にありがとう。出会って素晴らしい。最後に、「いい経験をしたね。」と言ってくれた、家族に感謝します。ドンノバット!

第23回スタディーツアーを終えて、バングラディッシュは私にとって特別な国となりました。日本に帰国して、新聞やテレビ等でバングラディッシュの事が報道されるとつい見てしまうのです。

バングラディッシュに到着して初め、日本と違う生活、人、車、カーにあふれた道路、水浸しの土地、井戸の水、トイレ等、これらが、貧しさが原因であると思っていました。けれどもそれらは貧しさが原因ではなく、それらすべてがバングラディッシュの文化であると気づきました。バングラディッシュの人は皆文化をとても大切にしたい国であると思いました。そして、その文化を大切にしながら現在、国の発展へと進んでいます。

このツアーに参加して良かったことの1つに、メンバーと交流し、共に礼拝をし、生活をもてたことです。特に、体調を悪くして寝込んだ時、みんなが心配してくれて、気をつけてくれて本当にうれしかった。そして、このメンバーと出会えて本当に良かったと感じました。

また、今回の経験を通して次回このツアーを行うにあたり、こうしたらいいなと思うことを言います。

私達は日本人(異国人)として迎えられ、常にBDPスタッフの人達に何かをされる(受身)側となっていたため、私達が何かをする(例えば"日本料理をつくるなど")機会がもてたら良かったと思います。また、準備会でもっと出し物を考える時間が欲しかったです。

バングラディッシュの経験は私の一生の思い出でもあり、さらなる進路へとつながっていったと思います。

2002年 夏バングラデシュ Study Tour

安東 真理

成田から電車に乗って家まで帰る中、外の景色をずっと見ていた。「やっぱり日本は豊かだな…」と思ってしまった。人々はみんなきれいな服を着ていて、靴も履いている。街にはビルが立ち並び、人々はみんな忙しく歩いている。買い物に出かけても、食料品売り場では選びきれないほどの食べ物が売られている。日本のすごさを感じると共に、バングラデシュで学んできたことを忘れてはいけないと思った。こんな日本の豊かな生活にまた慣れてしまいそうな自分が少し恐くなったからだと思う。

バングラデシュでの二週間の生活で私は様々なことを学んだ。一つ目は「本当の貧しさって何だろう？」ということである。私は大学で開発途上国について興味があったため貧しさについて少しは理解していたつもりであった。しかし実際バングラデシュで色々な人々の優しさに触れてみて本当に貧しいのは私なのではないか？と思ってしまった。日本は物質的には豊かであるが内面的な部分を見ると貧しいことが分かった。バングラデシュが将来経済的に豊かになったら内面的な優しさや助け合うことは難しくなってしまうのだろうか？ということを考えてしまった。物質的にも内面的にも豊かだといえるようになって初めて豊かな国であるといえるのではないか。

二つ目に、感謝することを学んだ。バングラデシュは日本で私が当たり前に使っていたことがすべて当たり前ではなかった。学校へ通うこと、水道の蛇口をひねって水を出すこと、電気があること、健康であること、など普段日本で私は当たり前のようにしてきたことばかりであったため改めて感謝することができたとともに、バングラデシュの人々がより良い生活ができるために私は支援していく必要があることに気づかされた。スタディーツアーで見てきたことを無駄にしているとは思わないと思った。

そして最後に、学校訪問をして改めて教育の大切さを知った。学校に通える子

供と街で働かざるを得ない子供の表情を比べてみると違っていた。学校に通える子供の目は輝いていたように思った。文字が読める、字が書けることによって自分達に自信がつくのではないか。この子供たちが大人になれば識字能力があるため自分の意思がしっかり持て、様々なことを提案できるようになるのではないだろうか。そして女性は医師とのやりとりが可能になるため自分の子供を自分の手で守れると思うのである。学校に通うことで、子供の視野が広がり、子供達に自信がつくそして将来への希望が持てるのである。

まだバングラデシュにはすべての子供が就学しているとはいえない。家が貧しくて家の手伝いをしなければならなかったり、教室がなかったり、十分な教師がいなかったりと困難な状態に置かれているからである。この状態が少しでも改善されるようになに不自由なく生活している私たちは支援していく必要があることを学んだ。私たち一人一人の力が必要なのだ。

今回のスタディーツアーを通し、私は改めて将来、子供の教育を支援していける職業につきたいと思った。バングラデシュで見てきたものをいつまでも忘れずにいたい。そしてまたバングラデシュで出会った子供たち、BDP のスタッフの方々に会いたい。貴重な経験をさせて下さった、BDP スタッフ、儀子さん、船戸さんそして両親に感謝している。



バングラでの出来事を振り返る。まず、空港での物乞い。ショックだった。同じ世界に、こんなことをしないとイケない子供がいる。小さな子なのに。寺小屋での子供たち。みんな本当に学校がすきで、勉強が好きなんだ。そういう気持ちはうらやましかった。歌とかダンスが上手なこともうらやましかった。スタッフの方々も。日本はテレビ・本などがいっぱいあるからどうしても受け身である自分と比べてうらやましかった。でもやっぱりお風呂、トイレ、洗濯は不便だった。私たちが日本から来たから不便、と感じるんだろうけど、もちろんバングラの人は不便だと感じてないだろうから失礼かもしれないけど、日本の方が便利であることは間違いない。きっと日本で生活したら快適だと感じるだろう。言い方は悪いけど、やっぱり発展途上国と先進国との違いを実感した。シェアできたらいいな、と思った。勉強したくてしょうがない子供たちがいて、とっても真剣だった。高校までみんな勉強できるようにしてあげたい。風景はとってもきれいだった。すばらしかった。こっちの人は暖かい、というか日本での暖かさとは度が違う、表現が違う。昔の日本ってこんな感じだったのかなーとも思ってみた。

高見沢 翠



バングラデシュでのんびり生活した分、日本のあわただしい生活に驚き、改めて両国の違いを実感しました。日常生活でもそれ以外でも両国の違いを感じる場面によくあいました。特にショックを受けたのは現地の学校を訪問した時です。授業を見て受けた最初の印象は「校舎がモロイ、電気がなくて暗い、皆勉強熱心」というものでした。そんな子ども達を見た時、フと自分の学校生活を思い出しました。私は特に大きな目標もないけど皆行ってるし、行くのが当たり前だから学校に行く、そんな感じでした。でも、子ども達の様子を実際に見たり、バングラデシュの現在の教育状況の事を聞くと自分自身をすごく反省しました。こんなに学ぶ意欲のある子が学校に行けなくて、私のような人が当たり前のように学校に行ってるのはすごく申し訳なく思いました。

私はたった2週間の間に、リキシャに乗ったり、サロワカミューズやサリーを着たり、観光では来れないような農村で生活したり、日本では出来ない貴重な体験ができました。また、何人もの物乞いの子に声をかけられたり、国内の貧富の差を感じたり、言葉の通じない子ども達とどうコミュニケーションをとかなど、いろいろ考えさせられました。それに日本がいかにも物質的に満たされているか、またその生活に慣れている自分にも気付かされました。やはり本やインターネットで見ると実際に現地へ行くのでは全然違うと思います。今はまだ自分の中でもちゃんと整理がついてないのですが、今回経験した事を活かしてアジアで起こっている問題の解決に少しでも、関わっていきたいと思ってます。また、自分自身を見つめ直して、感謝する心を忘れずに毎日過ごしていきたいです。



津田 悦美

バングラディッシュを訪れて…

◎私はこのツアーで、多くの事を学びました。同じアジアにいても、たった5タカの米も食べられない人々がいるという事を知りショックを受けました。私は余ったご飯を捨て、ムダに食料を買い腐ったら捨てる。それが当たり前になってしまっている日本がとても信じられなくなりました。

◎今回のツアーは去年よりも「貧しさと豊かさ」について考えさせられました。今まで経済的な面ばかりを見てバングラは貧しいと考えていた。しかしそんな貧しさを感じさせない人々が多くいて、「バングラは、世界最貧国なのか」とも思ってしまった。毎日毎日歌を歌い、踊り…。そんな生活を繰り返していれば自然に笑顔も出てくる。しかしその一方で物乞いをするうしか出来ない人もいる。どんな対応をすればいいのか…。笑顔さえ見せる事も出来なかった。やはりバングラの中にも貧富の差というものがあり、テレビやCDプレーヤーがある家庭もあれば、子供に物乞いをさせる家庭もある。世界が平等になる事は難しい。しかしこのような活動をして少しでも役に立つのならこれからも積極的に参加していきたい！

◎バングラの人々は歌が好き！私はこんなイメージが昨年から持っていました。といってもそんなイメージがついたのも毎日スタッフの方々と接していたからなんだと思うが…。日本では卒業式ぐらいにしか歌わない国家を、学校で毎日歌ったり、歓迎会ではかなり多くのダンスを踊ってくれたり…。その踊りと踊っている子供たちの笑顔は、見てる私たちをととても喜ばせてくれました。

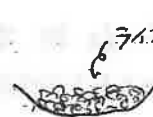
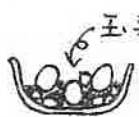
～最後に～

私は二年続けてこのツアーに参加させていただきました。その間、船戸先生、儀子さんには大変お世話になりました。また、二週間を共に過ごしたメンバーの方々にも迷惑ばかりかけてしい、感謝しています。ありがとうございました！

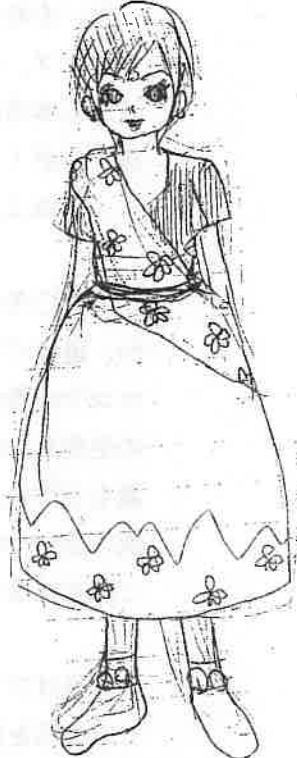
★オネックドンノバット アバデカホベ★ 葛西芙美子



ある日の食事♡



★ Culture & Show ★



力車!!

☆ Bチーム in ネトロコナ ☆

スタッフ:ヘモンドさん、アンフロスさん、オシムさん、ハビブさん

14日 プーバイルから名ドライバー・オシムさん運転のもと車でどこまでも真っ直ぐに続く道をひたすら北へ。風景がとてもキレイであつという間の4時間。宿舎に着くと村の子供達が大歓迎!! さっそく皆で宿舎の周りを散歩する。宿舎のすぐ裏側に大きな河が流れていて、ちょうど落日だった。その夕焼けの美しさに思わず涙するメンバーも。ネトロコナ唯一のスタッフ、ハビブさんはちょっとジェームズディーンばりのカッコイイ人(でも本当はとても愉快)。夜シェアリングをしている時、突然物凄い音が! ドォン!! ココナッツが屋根に落下したらしい。頭上に落ちたら…死ぬよ。

15日 ○午前中はボートに乗ってアグナティ村へ。早朝のスクールのせいか、道はぐちゃぐちゃ。長靴を泥だらけにしながら細い畦道に行く。ネトロコナの景色は本当に美しい。訪問先は幼稚園だが、家庭の事情で12歳の生徒もいた。ネトロコナでBDPが運営している学校はまだどこも新しく、数も少ない。早急に学校を建設しないと、現在幼稚園に通っている生徒が次に進む小学校がないという現状は問題だ。ココナッツジュースをご馳走になる。初めての味に戸惑うメンバー。正直、美味しいとは言えない。

○午後はフリータイム。今日の夕飯はチキンカレーだったので、鶏を捌くところを見せてもらった。日本では滅多に見れない光景に感謝。それから近くのバザールへ。喫茶店でのチャイもなかなか美味しい。バングラデュー風チューインガムを試す。あまりの苦さにほとんどのメンバーが絶句。ずっと噛んでいると口の中が真っ赤になる。

16日 ○金曜日はイスラム教の祝日。午前中はボートトリップへ。(この頃から疲労が原因か、体調を崩すメンバーが続出。心配だ) 立ち寄った村でジラピィなる甘い揚げ菓子とチャナチュールスナックを買う。どちらもかなり好評。○午後はフリータイム。近所の子供達と縄跳びやキャッチボールをして遊ぶ。その後練習中の「大きなかぶ」を実演! ギャラリーがだ

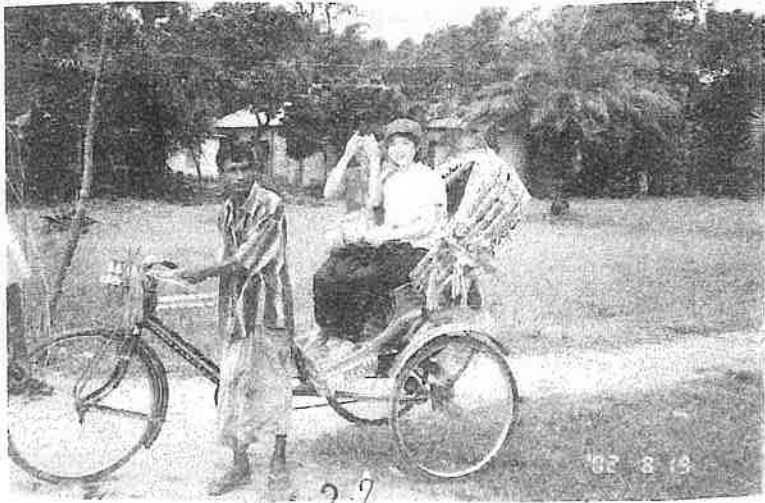
んだん増えて恥ずかしかった・・・オシムさんのシャルゴン（かぶ）はかなりの迫力！

17日 ヒンズー教の祭日（年に何度もあるらしい）。午前中は近くの漁村ジェネパラへ。小学校見学。ここでは先生の家を教室にして開校している。やはり学校の数が少ない事は大問題。

この村でヒンズー教の儀式を見学。なんと、ヤギをいけにえに！バングラデシュでは、日本で決して味わえない体験が突如やってくる。メンバーは驚きと緊張で目を覆っていた。○午後はフリータイム。子供達と交流&バングラデシュの大道芸人達によるパワフルな音楽を満喫。（体調が悪かったメンバーも回復してきて、一安心）

18日 プーバイルへ帰る日。最後にどうしても湖に映る朝焼けが見たくて早起きをしたものの、残念ながら曇り。○帰る途中で突然起こった二つの事件！一つは、あるメンバーに恋心を抱いた現地の青年が彼女に別れのプレゼントを。もう一つは、昨夜起こった政治関係者の殺人未遂事件で道路が通行止めに。これを機に暴動が発生する可能性もあり、ヘモンドさんの顔に緊張が走る。無事検問を通ることが出来たが、メンバーも不安と恐怖でグッタリ。その後テーゼの教会に立ち寄る。温かな歓迎と神秘的な礼拝に一同感動。信者の若者達やガロ民族出身の女性と交流。宗教や人種の枠を超えた空間がここにあった。○夕方、プーバイル宿舎に到着。エリックさん等プーバイルスタッフとも再会。この場所に微かな懐かしさを感じる。

19日 ○再びプーバイルでの日々が始まる。午前中は力車でエリックさん、オムルさん宅へ。（オヨン君は皆のアイドルだった）午後は一部のメンバーがラハシュさん宅へ。○夕方にカティラメンバーと合流。皆の土産話が楽しみだ。



第23回のスタディーツアーは、雨に降られました。出発前からインターネットによると、バングラデシュは、洪水で、疫病が蔓延しているなど出てきて、心配していたのですが、行ってみれば例年より若干雨が多い程度でした。情報というのもどれほど正確か、疑問です。

幸い、ネトロコナでは生涯に二度とは見られないのではないかとと思われるほど感動的な夕焼けを見ることができましたし、いまだかつて学校というのを見たことのない村に、初めてBDPの寺子屋学校が創設され、藁葺き小屋の小さな先生の家の学校で、幼稚科の子どもたち、年齢はまちまちで、8才、10才、12才の子どもまでいるというクラスでしたが、みんな目を輝かせて勉強をしている姿に接し、うれしさがこみ上げてきました。

しかし、私にとって最も印象的なニュースは、プーバイルにおいて、BDP学校出身の生徒が、ハイスクールを卒業してBDPの幼稚科の先生になった、ということでした。彼女は、ロヒマ・アクタルさん（17才）で、92年にボシュガオン学校の幼稚科に入学したとのことでした。かつて彼女を教えた先生を前にインタビューをしましたが、ちょっとはにかみながら、しかし、はっきりと質問にこたえてくれました。

彼女が幼稚科の時、お父さんが鉄道事故で亡くなってしまったこと、お兄さんが働いてお母さんを助け、一家を支えたこと、クラスでは真面目で、20人中4番であり、国語と歴史が好きだったなど、いろいろ話してくれました。彼女としてはカレッジまで行きたかったけれど、家の事情が許さなかったとのこと。

それよりも、私の心をもっとも傷めたのは、彼女が2000タカのお金がなかったためにSSC（ハイスクール卒業試験）を取得できなかったということです。BDPでも何とかしたいとは言っていましたが、せっかくハイスクールを卒業したのに資格がとれず、そのためBDPでも幼稚科の先生しかできないということです。

BDPの卒業生が、初めて、今度は先生になったといううれしいニュースも、このことを聞いた時、うれしさが半分になりました。うれしさの中にも、このような現実があるのだという、バングラデシュの厳しさに今一度、考えさせられた出来事でした。彼女が一日も早く、SSCが取れることを祈るのみです。

[illegible]

「黄金のベンガル」の空と風の下で

大 木 正 人

ツアー最後の日。アルバートさんからユーモアを交えてこんなことを尋ねられた。「バングラデシュのワースト2を挙げてみて?」「ワースト2?」

「そうワースト2」

言葉に詰まった。「貧困」「交通事情」「インフラの不整備」「じっと見つめてくること」いくつも思いつくのだが、しかし「これがワースト2」となかなか言い切れない。これらは確かに「悪い」ことには違いない。しかし決してワーストではない気がするのだ。しどろもどろでついには答えられない自分に、後で思った。僕は「これがワーストだ」と言い切ることもできない程度にしかバングラデシュを知らない、と。たった2週間のツアーなのだから当たり前といえは当たり前なのかもしれないが、それを理由に開き直るのははばかれる。おそらく逆に良いこと「ベスト2」を尋ねられても、僕は答えられないのではないか。この国について、この国の人について、ついに最悪なことも、最善な事についても答えられない自分。そんな自分に気付かされたという事が、今回の旅の一つの「収穫」なのかもしれない。その「収穫」は、旅を終えた今、苦くて大きな宿題だ。一体僕は何を見てきたのか。肝心な事を見過ごしてきた僕はこれから何を見ようとするのか。

ツアーを振り返る集いのさなか、みんなの言葉を聞きながら、様々な事を思った。

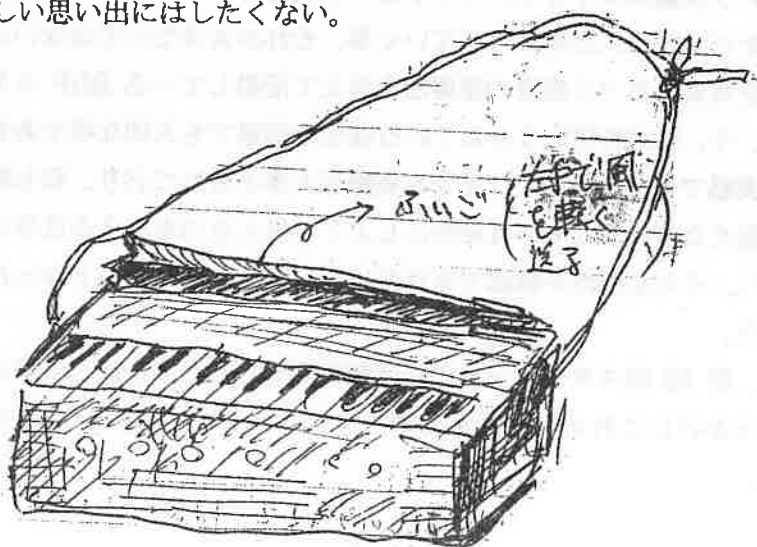
5%の人が80%の資源(富)を支配する国。10年間の学校教育を無事受けられる者は100人の内わずか5人。平均収入5000円。とてつもない軍事費。どれも驚きの数ばかりだ。しかし数字の羅列はリアリティを薄めもする。知識と知恵と想像力をもって、あるいは科学的な思考と文学的な思考をもって、よく見つめ考えるべきことのために、僕達が身につけて行かなければならないものは多い。日本での日々に出会う人達に重ねつけて、僕達ははたしてこれからどれ位バングラデシュのことを思い描いて行けるだろうか。

ふと思い出すのはキリストのことだ。子供達を祝福されてやまないイエス・キリスト。「妨げてはならない」と大人達を叱責し憤られる情熱を満ち続けるイエス・キリスト。そんなイエス・キリストが「収穫は多いが働き手が少ない」と嘆く。「だから収穫の神に願って働き手を送ってもらおう」と決意する。それがキリストの祈り。これは蒙昧な弟子達への招きの祈りなのだ。この祈りの前に僕達は立っている。だからできるだけ今回のツアーを通して知り合えた人達のことを思い起こし、想像しながら、少しでも祈って行こうと思う。BDPのスタッフや「寺子屋」の子供達や先生達のことを、たとえわずかでも覚えながら、僕達の思いを具体的につなげて行って支えたい。その時もはやバングラデシュはただ貧しいだけの遠い国ではなくなるだろう。「貧しさ」とか「貧困」という言葉で乱暴にひとくくりにしてしまうことの危うさと偏りを自覚しながら、事柄を考え祈る者でありたい。

ツアーから帰って読み始めたタゴールの言葉にこんな一節があった。

「人間の歴史は虐げられた者の勝利を忍耐強くまっている。」「君の頭で侮辱の重荷を運ぶべく屈服するな、恐怖にかられて。そして君の辱められた人間性のために隠れ家をたてるべく、虚偽と狡知を持って塹壕を掘るな。君自身を庇うために、弱きを強者の犠牲にするな。」

「あなたの空、あなたの風がとこしえに私の命の中で笛をふきならす」と称えられる「黄金のベンガル」でその空を見、風にふかれた日々をただの懐かしい思い出にはしたくない。



私のスタディーツアー

皇學館大學 社会福祉学部社会福祉学科 牧野彩華

『バングラデシュに寺子屋を贈ろう』という船戸先生の記事との出会いが私をバングラへと導いたと言っても過言ではない。

4年間、社会福祉学科というところで、福祉の何たるかを学び、施設実習へも行き、就職も控える立場となった。これまで私は、障害者、老人、児童などの社会福祉士の国家試験受験資格を得るための勉強しかしてこず、本来私が目指したかった福祉というものが失われてきていた。大学入学当初、世界でも日本でも困っている人々を助けたいという気持ちでいっぱいだった私自身が蘇ってきたのだ。

こんな初々しい気持ちを胸に、実際バングラへ行ってみて、私たちは何をしたかと言うと…いろんな人に「一体何をしてきたの？ボランティア？」と聞かれるけれど、返事に困って仕方ない。別に困っている人を直接救済しに行ったわけでも、元気づけに行ったわけでもない。そんな私たちのツアーって一体何だったのだろう？

BDP スタッフの活動ぶりや、小学校の様子、状態を見ていて、私たちは何かをして「あげる」ために行ったというのではなく、私たちが何かを学びに、このツアーの名(スタディーツアー)の通り勉強させてもらいに行ったという方が正しいという事に気づいた。バングラの人々のために直接役立ったという実感はなくても、今より先の未来を考えると国として発展していく力をバングラ人自身に付けていく事、それが大事なのではないか。その人材を育成するべく教育の重要性を訴えて活動している BDP スタッフの姿が、今、私が目指そうとしている福祉の職場でも大切な事であると言えると思えた。福祉では見守る姿勢が大事とされており、私も障害や問題を抱えた方に対して、自発的にしようと思える力を与える仕事がしたいと思う。その必要性が確認できただけでも実りあるツアーとなったと心から思う。

最後に、第 23 回スタディーツアーは無事終えられた事を嬉しく思い、これをきっかけにこれからの私たちのスタディーツアー(?)が始まる事を願いたい。

宗形 恭枝

海外旅行は私にとって初めてではなかった。しかし、このツアーは私に今までのどんな旅行よりもすばらしい経験をたくさん与えてくれた。その数多く得たものの中から、ここでは大きく二つの事について触れたい。一つは、貧しさとは一体何なのかという疑問だ。バングラデシュは確かに物質的にはとても乏しい国で、貧困のために死んでいく子供が多い。しかし、訪れた学校や村で出会った人々は皆私達を温かく迎えてくれて、彼らが貧しい生活にあることなど忘れてしまいそうになった。また、バングラデシュ人は自分の国に高い誇りを持っていて、自分達の文化や宗教をととても大切にしている。そんな豊かな慣習や人々の心に触れていけばいくほど、何故自分は今までバングラデシュに対して貧困と飢えに苦しむ貧しい国というイメージを持っていたのだろう、と恥ずかしくなった。よって、このツアーを通して、私の中の発展途上国＝貧しい国というおかしい概念みたいなものが無くなった。

二つ目に、教育を受ける事がいかに大切かという事を改めて感じた。バングラデシュの学校はバナナの皮と藁で作られたとても簡素で小さいものだった。しかし、その狭くて環境も十分ではない教室で生徒達は目をキラキラ輝かせながら、一生懸命に授業に取り組んでいた。彼らの勉強に対する熱意を見ていると、今まで面倒くさそうに授業を受けていた自分を反省せずにはいられない。また、教育を受けられるということがいかに恵まれた貴重な事なのか、彼らから教わった。

最後に、私達を温かく歓迎して下さった現地の人々と親切にお世話して下さい下さったBDPスタッフの方々、いつも元気をくれたツアーメンバーに感謝の気持ちを贈ります。



バングラディシュに着いて、空港を出ると物乞いの子どもたちに出会った。私は、その現実を目の当たりにして、バングラディシュに来たことを早くも後悔した！バングラディシュに着いたのも遅く、辺りが暗かったため、恐怖心でいっぱいだったからだ。しかし夜が明けると、昨夜とは一味違った緑がたくさんのバングラディシュを見ることができた。そして、BDP スタッフの人や、町の人、子どもたちとの日々の生活を通し、人の優しさに触れることで、バングラディシュを好きになり、もっともっと知りたい！と感じるようになった。

私がバングラディシュに望むこと・・・それは、身勝手かもしれないが、このままの自然を守り、自分たちの伝統と誇りをいつまでも大切にしていって欲しい！ということである。私の生活の基本は日本であって、バングラディシュではない。だから、少しだけ滞在するには今のバングラディシュのままでいて欲しいと感じてしまうのかもしれない。しかし、ダッカの町を考えてみると、車と道につまれたゴミが印象に残る。人は便利になるとどんどん食欲になっていくものだと言っているような気がしてならない。

これからバングラディシュはどんどん発展していくだろう。しかし、便利なものばかり追求せず、バングラディシュのよき伝統や文化・自然を生かして、発展していって欲しいと思う。

バングラディシュでは、ゆったりとした時間の中で同じような考えを持つ人たちとの意見交換を通して、たくさんのことを考える機会と、自分を見つめ直す時間を与えられた。大学生になって、今まで以上に自分の時間を使うことが増えたが、毎日せかせかと慌ただしく過ごし、じっくり様々なことを考えることをしていなかった気がする。しかし、バングラディシュでは、テレビや情報が無い生活を送り、自分が小学生の頃と同じような時間を過ごせた。とても懐かしく、また自分のことを考える機会が与えられたことに感謝です。

今まで日本の便利な生活に慣れ、この環境を当たり前のように感じていたが、私にはたくさんの選択肢が与えられていて、とても恵まれた環境であるということを感じるとともに、日々の生活の中には、感謝すべきことがたくさんあるということをバングラディッシュで再確認させられた2週間でした。



😊：私とバンラデシュ 😊：ホ^モ林^マ衣^ニ子

初めて日本の外に出る感動。そして異国の土を踏む感動、
現地の人々と出会った時の感動、また別れる時の感動……。
このバンラデシュ スタディーツアーは 私に様々な感動を与えてくれた。私は、このツアーに参加した動機は、最近自分は十九年間生きてきた「日本」をもっと知りたいと思う様になった。そんな中、このスタディーツアーのチラシを見つけ、舟戸先生が大学へ来てして下さったお話で私の決意は固まったのだ。同じアジアの別の一角から見た「日本」。バンラデシュに行き、見つめ直す自分の国。この機会を逃すまい! と思った。バンラデシュは、生活のスタイルが日本と全く違い、最初は正直不便に感じた事もあった。日本では蛇口をひねれば出る水が、バンラデシュでは、トイレや洗濯、お風呂 全て井戸のつるべでくまなわなければ、水が出ない。最初こそ不便に感じていたものの、二日目あたりから「井戸で水をくむ」ことが楽しくなり、また、これが人間の本来の生活スタイルなのだな、と思ったりもした。そして、私はバンラデシュの地で様々な人に出会えた。行く場所 行く場所でそれぞれ私達を歓迎してくれた皆さん、学校の子どもたち、そして先生、BDPスタッフ……。ここに書き切れない程の人と出会った。私がこの出会った人に対して感じたことは、「皆、一生懸命生きている」ということだ。いつも笑顔で受け入れて下さった皆の事は今でも頭に焼き付いている。言葉がお互いに分からなくても、目や笑顔でコミュニケーションが出来る、というのは本当に素晴らしい事だと思った。そしてバンラデシュにとって欠かせない存在のBDPスタッフの皆さんとの出会いも本当に素晴らしいものだった。スタッフの皆さんのお話は、自分が今まで考えていた「教育」そして、今受けている「教育」……。 「教育」について真剣に考え直させてくれる本当に良い機会であった。バンラデシュで体験した事は今後自分の糧になる事ばかりで、本当に良かったと、心の底からそう思っている。

「国際協力のあり方と教育」

山崎 裕子 

私は今回このバングラデシュスタディーツアーに参加して、国際協力のあり方と教育について深く考えさせられた。そしてバングラデシュを訪問して、「これこそが国際協力のキーワードだ!」と思える言葉を見出すことができた。それは、「教育」である。まず、最初の「教育」として、文字通りの子ども達への普通教育が挙げられる。現地の実情を目のあたりにして、私達は何気なく受けてきた普通の教育の重みを実感した。現在貧富の激しいバングラデシュでは、諸事情により教育を受けたくても受けられない子ども達がたくさんいる。現地の子子ども達にとっての「学校」は、私達にとっての学校という存在よりもはるかに大きな場所であった。バングラデシュだけでなく、発展途上諸国において、一部のみに偏らない本当の経済的発展は子ども達への教育の充実から始まるというのは、間違いのないことである。日本を始めとする経済的先進諸国は、女性の教育に重点をおいた子ども達の学習・交流施設における援助を、より積極的にすべきであると思う。また、今まで当たり前のよう受けてきた教育に感謝したいと思った。

また、教育の第2の意味としてもっとも重要なことがある。私は今回このスタディーツアーでバングラデシュに行くまで、この国について全く知らなかった。そして日本人の多くは発展途上国を見下し、外国諸国のことをまるで知らず、観光目的以外では知ろうともしない。こういった人達が多い日本という国は、経済的には確かに先進国かもしれないが、アジアの、世界の一員としては、まだまだ途上国である。もっとも重要な教育、それは援助する立場である、日本人への国際教育だと私は思う。

最後に、今後私達が国際協力をしていく上で重要なことは何だろうか。まずは、私達一人一人が外国諸国をよく知り、どんなに小さなことからでも取り組んでいくこと。そして、「教育」の精神を忘れずに行うのが、国際協力、経済的発展途上国への援助のあり方だと思う。



藤沢美由紀

バングラデシュで過ごしたあの2週間は、今も色濃く私の中に焼きついている。見たもの、触れたもの、感じたこと、吸収した全てが新鮮で、又、私に学びをもたらした。

「まずは、この国を好きになることから。」という船戸先生のお考えのもとに、私達はバングラデシュの素晴らしさに触れる様々な体験をした。外を歩けば目に映る力強い緑、きらきらと陽を受けてかがやく田んぼの水面、女性達の衣服の鮮やかな色彩、そして、おいしい食事、子供たちの笑顔。今、バングラデシュという言葉聞いて思い出すのは、それらだ。同じようにバングラデシュという言葉聞いて、洪水や栄養失調しかおもしろい受かべることの出来ない私の友人達を思うと、私はバングラデシュで実際に過ごせた日々を幸福に思う。

けれどもそんな、バングラデシュの良い面をたくさん見られるツア－の中にあっても、時々垣間見てしまう「現実」があった。赤ちゃんを腕に抱え、私達の乗る車の外から強くこちらを見据えて、手を差し出す女性。路上にあふれる物売りの少年達。朝も昼も、私達の泊まる建物の周囲で遊んでいる子供達。又、私達が毎日毎食いただいていたような食事は、バングラデシュでは本当に豪華なものなのだという事。そういったことを思い出すと、考え込んでしまわずにはいられない。彼らのためにしてあげられることは何か？なんて偉そうなことは口にしたいと思わないが、彼らと私はどうつながっていて、私のなすべきことは何だろう・・・それをずっと考え続けている。

「途上国」「貧しい国」これらの言葉でひとくくりにしてしまうか、本やニュースの向こう側の国にとらえるか、またはそういった場面に出てくる国とも認識せずに無関心に過ごすか。日本で普通に生活していたら、バングラデシュへの関わりはだいたいこんなところだろう。けれども私は今、バングラデシュを強い親近感をもってとらえることができる。自分と関係させて考えることができる。それは私の宝物。

そして私は、バングラデシュだけでなく、世界の他の国々にも同じように対することができると思う。それが可能なことを知り、そうしたいと願うようになったから。この思いはずっと変わることなく、持ち続けていきたい。



23th Study tour 3in1art

私達は2週間...という矢張りバングラデシュの旅を終え、非常にたくさんのものを得、学び感じ取りました。その充実した2週間を振り返り、様々な視点からバングラデシュを見つめ直す為、いくつかのアンケート調査を行いました。今後参加される皆様の力になれば幸いです。

バングラデシュに行く為の必需品は？(忘れると恐いもの...)

- 1位 虫よけスプレー (無いと本当に笑えないデス!) ちなみに
かゆみ止め いろいろ何個か。
- 2位 長靴 (無いとかなり苦戦します...、あと大活躍してくれますね)
- 3位 風邪薬 (私は忘れて泣きました!) 発熱時用に
コンセントラートも良いかも...

その他・小物干し洗濯ばさみが円形になっている...カメラ用の電池、靴下 などが有りました

2

とっさの一言 ベンガル語 ワンポイントレッスン

- 1位 ^{ダントツ} ドンバット!! (ダントツでした...。ありがとうはいい聞いてもバ地良いですよね!)
(『ありがとう』)
- 2位 クグモジャ☆ (1回の食事で最低10回は言っています! 絶対会)
(『とてもおいしい』)
- 3位 オシュビダナイ!! (使いやすいです☆ 慣れるとどんどん使っていきます。)
(『問題ない』)

その他・アムケテチャイ!(『マンゴーを下さい』)・ティカヒ!(『OK!』)など色々な言葉が挙がりました。

好きな食べ物 ♪ (美味しかった食べ物!!)

- 1位 マンゴー (バングラデシュのマンゴーの味には本当に感動します)
- 2位 チャー (ミルクティーのことです。これもやみつきになるほど美味です。)
- 3位 魚カレー (カレー争いを制覇したのは君! おめでとう☆)

その他 他にもいっぱいあります。朝食に食べるルティ(クレープの様な感じです。)、ジャックフルーツ、たまごカレー、チキンカレー、チャナチュ(おつまみ?)、パイナップル etc です!! お試しあれ!!

バングラデシュでどんな遊びをしたか。(今後のオススメ)

1位 追いかけっこ (バングラデシュの子ども達は走るのが好きなのが多いのでヨ!!)

2位 風船 (風船をあげると、たちまち皆大はしゃぎでした)

3位 アブラハム体操 (右手、左手、右足など体でコミュニケーション出来ます)

その他

折り紙 (オススメですよ!）、なわとび、リコーダー、アレクスー万尺、大きなかぶ etc がありました!!

バングラデシュの服装は ～ で決まり!

1位 綺麗なサワカニース! (バングラデシュでの民族衣装です! バングラ行くならサワカ買うべし! ㊗️)
ダントツです!!

2位 帽子×Tシャツ×長ズボン×長靴 (Tシャツ長ズボンヘアを好む人多し)

3位 ジャージ! (過ごしやすいです～♪ お腹もゆるい! 笑)

その他

男性の方は「ルンギ」という下半身だけの現地の衣装があります。
はくと素散な男になれます! (たぶん……)

バングラデシュに行ったらここを見逃すな!

1位 現地の子ども達の笑顔 ㊗️ (たまりません… やられます)

2位 ネットロコナの夕日 (Bチーム(ネトロコナチーム)しか見えませんでしたが大イラチームにも是非見せてあげたが、1位の絶品)

3位 豊かな自然 (バングラデシュに行って色々考えさせられました。自然もその項目の一つとなりました)

その他

場所それぞれのチャイ(味が違います!）、幼児のこしひも、音空、ベンガル人のまつげの長さ(笑)などです!



現地で注意しなければいけないもの。

1位 虫 (虫君 大不人気! めんね... 昔々なの...)

2位 井戸水を飲まない! (さんぞん飲まない 様に言われていたのに風邪ひいたとき 井戸水で飲んだ秘)

3位 生活のペースを乱さない! (重要です!!)

その他 車, 十分な休息をとる, 1日たつられない様に! etc.
がありました。



今後改善したいと思った事

1位 もっと言語を勉強する (やはりいっぱい言えたら
うれしいですよ!)

2位 何かアピール出来るものを持つ! (自分の一芸は 生きてる限り
役に立ちますね...)

3位 準備会からこのスタディーツアー (その通り!.....)
は始まっているという認識を持つ!

その他 農村にもっと居たい, もっと色々なバン格拉デシュを知りたい! etc
がありました!



バン格拉デシュのここが女子き!

1位 子供の笑顔☺ (やはり... 笑顔! ☺)

2位 スタッフの暖かさ (私達の現地での生活は
BDPスタッフの方に変えられています☆)

3位 船の上からの眺め (船の天上に乗れるんです!)

その他 ネトロコナの風景, 自然, 音楽, 食べ物, 犬, やき,
など色々な意見がありました☆ (37) ページです!

編集後記

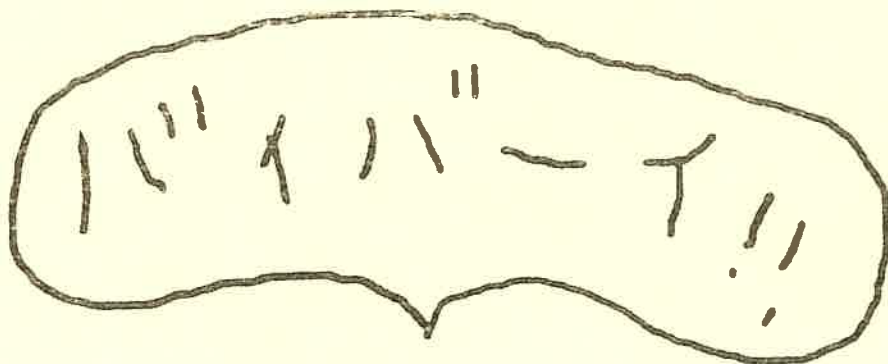
バングラデシュの思い出全てをこの一冊にまとめるのはとてもムリだったが、この報告書を通して、少しでも多くの方がこのステキな国に興味を抱いてくれたらとても嬉しいと思って制作した。報告書委員の皆、どうもお疲れ様でした！やっと出来上がったね。そして、第23回メンバーの皆さん、もう一度あのすばらしい体験を思い出そう！ 恭枝♪

要領が悪く、他の皆さんに迷惑をたくさんかけてしまいました。最近忙しくて本当に充実した日々とはこのことだ、と実感しています。かなりいっぱいいっぱいですが、この冊子を手にした方皆がバングラデシュを好きになってくれますように。 麻衣子♪

編集って疲れるな、と思いました。今後編集する人は日程を早めに組みましょう、と言いたい。編集をもっと充実させたかったのに日にちがなくて急いで仕上げることになってしまったのがとても残念です。でも毎日冊子について話し合い、バングラデシュを思い出し、ツアーを2倍感じられたようにも思います。作業をしている時はなんだかんだ楽しかったし。この冊子で参加者がツアーを思い出すことが出来たり、また読んで下さった方々にツアーがどんなものか分かって頂けたら幸いです。 清佳♪

メンバーみんなのバングラデシュに対する熱い思い、楽しかった思い出がいっぱい詰まった報告書になったと思います。気に入っていただけましたか。編集は、なかなか大変な作業でしたが、その分やりがいもありました。楽しかったです。編集係のみんな、ほんとお疲れ様！今度、ご飯でも食べに行こうね。

最後に、この報告書が多くの人と出会いますように。 有紀子♪



～♡～♡～♡～♡
 バングラデシュに
 『寺子屋』を贈ろう♡



The Asia Christian Education Fund

アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-26

TEL. & FAX 03-3208-1925

e-mail: acef@rg7.so-net.ne.jp

http://www.bluerain.fw/acef

あなたもACEFの
 会員になってください！

学生会員	年額1口	2,000円
------	------	--------

個人会員	年額1口	5,000円
------	------	--------

団体会員	年額1口	50,000円
------	------	---------

一時寄付	金額自由
------	------

郵便振替口座

00100-0-185540

アジアキリスト教教育基金